魅力あふれる私立小学校の世界

日本私立小学校連合会　会長 ※
東京私立初等学校協会　会長 ※（※ 2020年4月インタビュー時点）
昭和女子大学附属昭和小学校　前校長

小泉　清裕

小学校の英語教科化や理数教育の充実、道徳教育の展開などを盛り込んだ新学習指導要領に注目が集まる中、先駆的な教育の成果で圧倒的な存在感を示しているのが私立小学校です。その尽きせぬ魅力について、日本私立小学校連合会会長の小泉清裕先生にお話を伺いました。

（聞き手　大学通信代表取締役社長・田所浩志）

――新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、4月7日には7都府県を、16日には全国を対象に緊急事態宣言が発令されました。小学校の現場ではどのような対応が求められるでしょうか。

小泉　休校措置により春休みが伸び、またオリンピックが来年7月に延期されたことで、恐らく今年は夏休みを半分に削ることになるでしょう（注：このインタビューは2020年4月に収録されたものです）。つまり、あの真夏の暑い最中に、子どもたちが登校することになるのです。しかし、インターネットなどで海外の状況を見ますと、イギリスは6月まで、フランスなどは夏休みまで学校を休みにするといいます。にもかかわらず、フランスの教育大臣は「授業には何の問題もない」と語る。オンライン授業で対応するから大丈夫だというのです。

――オンライン会議システムなどを活用した授業ですね。

小泉　ただ、小学校でいちばん大事な、子ども同士で触れ合う時間がなくなる、その部分は懸念されます。

例えば、フィンランドの小学校では「ディスカッション」を主にした授業が行われています。私も現地で実際に見学をしましたが、算数や理科の時間でさえ、教科書やノートがなく、黒板すらない。先生が真ん中に立って、皆に「これはどう思う？」などと質問している。つまり、暗記など自分でできることは家でやればよく、学校では「そこでしかできないこと」を学ぶわけです。

放課後はネット配信やメール、クラウドといったシステムを使って課題を提出してもらいます。子どもたちは、今日学んだことを自宅で復習し、「こういうことを考えました」と先生にメールを送り、先生もそれに対してコメントを返します。

私はそのうちの一人の先生の自宅を訪問しました。季節は夏で、夜中の11時過ぎでも白夜で明るかったのですが、先生は自宅のコンピュータのスイッチを入れ、子どもたちから送られてきたさまざまな学習データを処理するんです。「まさにこれが、これからの時代の教育だ」と感じました。

――子どもたちも自宅できちんと予習、復習を行い、学校ではコミュニケーション重視の対話型授業を実践している。

小泉　日本の場合、「知識を与える」という考え方が明治以来ずっと続いていて、「先生が教えて子どもが学ぶ」というスタイルが基本でした。今でもほとんどの場合、黒板が教室の前面にあり、子どもたちはそちらを向いて授業を受けるわけですが、教育先進国では、今やそうしたスタイルは過去のものになりつつあります。「知識の宝庫」としての教師の役割は終わりつつあるわけです。

――知識はインターネットなどを活用すれば、いくらでも得ることができます。

小泉　今や、百科事典的な教師はいらなくなっている。ただ、どうすれば自分たちで得たさまざまな知識から、自分の考えをクリエイトできるかという方向にシフトし始めています。しかし、もしかすると、こうした欧米型の教育、すなわち知識を与えこむインストラクション型ではなくて、学び手が中心になるエデュケーション型の教育は、日本でも昔からあったのかもしれません。

かつて、日本の江戸時代にあった「寺子屋」は、私たちが思うほど知識偏重型の場ではないんですね。教育システムがとてもよくできていて、「言葉を学ぶということは、そこに知識が絶対にくっついてくる」という考え方をするのです。具体的には、漁師の子どもには魚の獲り方について書かれたものを、商売をやっている家の子どもには商売の方法が書かれた書物を通じて言葉を学ばせた。つまり、教科書が今のように一律ではなくて、その子に合ったものを読ませるわけです。『徒然草』や中国の漢詩などのような古典は皆学ぶけれども、あとは学ぶ材料を、その子の環境に合わせて選んでいた。

――まさに「個」に合わせた教育ですね。

小泉　江戸時代の人口は約3000万人と推定されていますが、幕末にはおよそ1万6500校ぐらいの寺子屋があったそうです。現在の小学校が約1万9700校であるのに対し、人口が4分の1しかない時代に、これだけの数があった。その後、明治に入って文部省ができ、明治5年には近代的な学制が敷かれ、翌6年には小学校が全国に設置されるのですが、当時の公立小学校が約8000校に対して、私立学校は4599校。つまり3分の1は私立でしたし、100人レベルで子どもたちがいたような寺子屋は、公立学校として召し上げられたものだった。明治政府が作った小学校というのは、寺子屋が原点だと言えるのです。しかも、寺子屋の時代の識字率は85%くらいだったと言われています。

――江戸時代の日本の教育水準は素晴らしかったのですね。

小泉　同時代の、世界でナンバーワンを競っていたパリやロンドンでさえ、30%まで達していない。計算ができること、読み書きができるという点で言うと、日本が世界最高峰の位置にいた。

シュリーマンという、トロイアの遺跡を発掘した著名な考古学者が1865年、幕末の日本を訪れています。その時のことを『シュリーマン旅行記清国・日本』という本に書いているのですが、日本はとんでもない国だ、万人が文字を読める、と。日本の教育は、世界的に名高い水準にあったのですね。

ただ、明治政府は政治や経済、医学といった分野が欧米に比べ劣っていると感じ、子どもたちのレベルを一斉に上げなければいけないと考えた。そこから、黒板に向かわせ知識を教え込む「一斉教育」のスタイルが始まり、150年間続くことになります。そこでの先生の役割は「教える」ことです。

しかし、これからの先生の役割は何かというと、コーディネートすることであったり、サポートすることにシフトしていかなければならない。

私の大学院時代の恩師は99歳で亡くなられましたが、一度読んだ文章はすべて覚えておられた。英語、日本語、イタリア語、フランス語、それもまるまる本一冊分といった量をです。「世の中には天才という人がいるものだ」と学生時代、皆で驚かされたものです。しかし今、先生のその膨大な知識はネット上にある。私たちが若いころはすごいことだったけれども、今日、そういう人を育てる必要はなくなってきたのかもしれない。時代によって、あるいはAIのような技術の進化によって、私たちは新しい教育へと向かっていかなければならないのではないでしょうか。

小泉 清裕先生

日本私立小学校連合会会長、東京私立初等学校協会会長（2020年4月インタビュー時点）。昭和女子大学大学院文学研究科特任教授。NHK教育テレビ（現Eテレ）『スーパーえいごリアン』企画委員や日本児童英語教育学会副会長（現・理事）などを歴任。『小学校英語　授業づくりの心と技―児童の学びの力を育む』（2020年3月刊、大修館書店）など著書多数。

幼児期の経験がその後の成長を決める

――先生が考える、小学校にとっての教育のあり方とは、どのようなものでしょうか。

小泉　これまでは「日本の教育」というスケールで考えていればよかったのですが、これからはグローバルな視野で、「学び」の中に何が必要かということを土台から考え直す必要があります。また、その学びも日本語だけで行うような時代ではなくなりつつあることは確かだと思います。

それを踏まえた上で、小学校という場で、何を目指すべきかと言えば、それは単に中学校や高等学校、大学で学ぶべきことの「先取り」を行うというのではなく、小学校のときでなければ学べないこと、経験できないことにフォーカスを当てた教育をしっかりと行う必要があるということです。

――どうしても日本は、物事を早く習得することに価値を見出しがちです。

小泉　誰よりも早く自転車に乗れた子どもはすごい子だ、早く喋れた子は素晴らしい。3歳で漢字の書けた子は優れている……。しかし、どうもそういうことではないのかもしれない。結局のところ、早くマスターできたということを評価の対象にするのではなくて、例えば20年後に、小学校で培ってきたものが、その人の人生の中でどう生かされているかを考える必要があるのではないでしょうか。

今までは、例えば小学校を卒業して、私立中学を受験するときに、偏差値の高い中学に合格した子が優れているとか、それが大学入学まで続いていき、小学校は中学校のため、中学校は高校のため、高校は大学のため……と捉えられがちです。しかし、そうではなく、もっとグローバルで世界的なスケールの中で人生を考え、「小学校として何が重要なのか」ということを問い直す時期に来ていると思います。

――とても重要な提言です。

小泉　そこで、小学校に上がる前に一番重要なことは何かというと、やはり「身体」だと思います。自分自身の体を、どう使いこなせる人間になるか。ですから、思いきり遊ばせること。もう一つは「感覚」ですね。

小学校に入学してきたときに、泥だんごが作れない子がたくさんいる。砂や水に触

りたくないとう子どもが増えているのです。

例えば、昭和こども園（昭和女子大学附属の認定こども園）には「泥んこ池」があります。夢中で遊んでいると、鼻の中までドロが詰まるような遊び場です。それで、一人だけだと遊べないんだけれど、誰か一人が遊びだすと、みんなもそれに続く。共同作業というか、同じことをやりたくなるんですね。そうすると、次からは親たちが驚くくらい、女の子も泥だらけになって遊ぶ。親は、子どもたちにそんな遊びは絶対にさせようとはしない。でも、こども園で、そうした経験がいかに楽しいか熱心に語る娘を見て、「これは大事なことかもしれない」と気づかされるのです。

そうした体を鍛えることと、感性、五感を使うということが、小学校に上がる前の過程ではとても大事です。その経験があるかないかで、その後の成長に大きな差が出てきます。

そして、小学校に入学したときに、今度はそういう感性をいかに拡げてあげることができるかが大事なのだと思います。

0歳から幼稚園までの6年間と、小学校の6年間は「同じ6年」ですが、乳幼児期の6年間の方がずっとゆっくり流れます。でも、その時期までに培ったものが、小学校に入ってからの体験や学びに、決定的な影響をもたらすのです。

――そうした経験を十分に踏まえないで小学校に上がってきた子どもたちには、どう対処すればよいでしょう。

小泉　幼児期にやり損ねたことを、もう一度小学校で追体験させてあげる必要があるでしょう。私はこれまで英語教師として、幼稚園の園長、こども園の統括園長から小・中・高等学校、大学、大学院生まで教えてきました。その経験から、中学や高校でなかなか成績が伸びない子どものどこに問題があるかというと、やはりある種の感覚的なもの、身体や五感を通じての体験を、幼稚園や、その延長線として小学校の4年生くらいまでにしっかりと培ってこなかったところにあると感じているからです。多くの私立学校が、そうした教育に力を入れて取り組んでいます。

思考の基盤となる「言語力」を鍛える

――学習指導要領の改訂に伴い、小学校での学びがいま、大きく変わりつつあります。

小泉　2020年度からは小学校のカリキュラムに「プログラミング」が加わります。プログラミングとは何かというと、コンピュータにプログラミング言語で指示することと考えてしまいがちですが、それだけではありません。例えば今日、こうやって取材を受けるときでも、どんな質問に対してどう答えるか、自分なりに論理的に筋道を立てて考えるではないですか。これもプログラミングの一種だと言えます。

2年ほど前、プログラミング教育のエキスパートの先生を校長研修会にお呼びして、「プログラミングとは何か」というテーマでお話をしていただいたことがあります。そこで先生が言われたのは、「プログラミングとは言語化のことである」ということ。言語で伝えられないものが、コンピュータを動かせるわけがない。ですから、まずはきちんと言語化をするための力を鍛えることから始めなければなりません。

――「言語化」を鍛えるというと、プログラミングには国語教育が重要だということでしょうか。

小泉　そうです。言語化というのは「思考力」のことです。思考は言語で行っています。ですから、言語力をつけないと思考力は鍛えられません。例えば、英語をペラペラ喋っているように見えても、話している内容があまりにお粗末すぎると、「何、この人、その程度のレベル？」となりますよね。そこで言われるレベルとは、英語のレベルではなくて、いわゆる知性、その人の持っているバックグラウンドがどの程度であるのかが見られているわけです。

また、今注目を集めているAIは、これから先の10年で飛躍的な進歩を遂げることでしょう。しかし、そうした技術の進歩にただついていくことが教育でしょうか。そうではなく、教育という現場でそのAIをうまく活用する必要があります。すなわち、AIを活用できるだけの思考力を持っていなければならないということです。

私たちが今、「2020年代の私立小学校の教育はどうあるべきか」というテーマで考えなければならないのは、科学技術が進む現代だからこそ、「人間性」とは何か、思いやりだとか愛情、理性、あるいは倫理観や共働力といったものを、子どもたちにどう養っていくかということだと思います。それは、AIなどの技術とは両極端の構図になるわけですけれども、AIが進歩すればするだけ、一方で、私たちは人間性というものの取り扱いについてさらに深く学ばなければならないということなのです。

「不易と流行」という言葉がありますが、私たちはただ流行だけではなく、不易の部分も深めて、両方に伸びていかなくてはなりません。科学の進歩ばかりが進んで一方が疎かになると、人間性が衰えてしまいます。ですから、科学の進歩が進めば進むほど、人間教育、人間性の教育と言いますか、愛情や優しさ、あるいは理性や感性といった方向に拡げていくことが教育の進歩だと考えています。

――そうした上で、新しい教育を再構築していかなければならない。

小泉　例えば、私は幼稚園児から大学院生まで、英語を教えるときに何を重視しているかといえば、まずは言語として捉えるようにしています。

英語は、世界で6000から1万近くあるといわれる言語の中の一つでしかありません。そうした中で、英語「を」学ぶのではなく、英語「で」何かを学ぶという姿勢で向き合わないと、ただ単に内容のない、ぺらぺらの英語でしか習得できません。

ですから、小学校で言えば、間違いなく国語教育を主にして、言葉の教育の一つとして英語を学ぶという姿勢を持たないといけない。英語の喋り方を学ぶのではなくて、英語というものが持っている「文化」というものも含めて捉えていく必要があります。ですから、急いで英語をマスターしなければならないということはないと思います。

――中身の習熟が大事であると。

小泉　英語も、それが必要になったときに使えるようにしておくということが大事なのであって、小学校のうちから先取りして、何でもかんでも早くマスターすればいいというものではないと思います。

これまでも、私立学校では外国語教育として英語だけではなく、フランス語を学ばせている学校もありますし、そういうことも含めて、英語を「言語教育」として考える。そして、言語教育というのは「思考」なのだということです。言葉というのは思考に直接つながりますので、その思考力を上げるということが、言語教育の中では一番重要なことだと思います。

――思考力を鍛えるには母語としての日本語が大切で、日本語で意味のある内容を発信できなければ英語でも発信できない。グローバル時代にふさわしいコミュニケーション力が身につかないということですね。

小泉　日本語で語れないものは、英語でも絶対に語れません。トータルな言語教育の中に、英語という教科が入って来たと捉えることが一番かなと思います。単に英語を学べばいいということではなくて、「言語」を学ぶ。そして思考力を高めるということが、とても大切なことになるだろうと思います。

私学が教育の多様性を形作ってきた

小泉　いま、公立学校の私立化が始まっています。私立学校の特徴の一つに、小学校から中高、さらには大学までの一貫教育というのがありますが、2016年に小中の連携校、いわゆる「義務教育学校」というのができて、19年度の段階で94校設置されています。それを今後さらに増やして、小中一貫校も加えると500校ぐらいにするという計画があるようです。ある種、「公立学校の私立化」といえるでしょう。

公立学校の場合、中高連携よりも小中連携の方が取り組みやすいというのは、教育委員会の区分の違いにもよるようですが、小中連携では9年間の学びについて、どのように分けてもいい。「3－3－3」でもいいし、「4－4－1」でもいい。私立だと、小中高の12年間を「4－4－4」制に分けて教育を行っている学校もありますが、そういうことが公立学校でもかなり自由にできるようになりつつあります。そうすると、今まで私立が100年以上かけて築いてきた独自の教育システムが、公立学校でもできてしまうわけです。

――私立学校が蓄積してきた教育のノウハウ、知的資産が、公立学校でも模倣されるようになる。

小泉　例えば都立でも、すでに立川に英語で授業を行う中高一貫の国際中等教育学校が設置され、都内ならどこからでも通うことができます。そこに、22年度からは附属小学校を設置する構想もあり、実現すれば全国で初めて公立の小中高連携校が誕生するわけです。

公立学校には学区制というものがありますが、同校のようにどこからでも通えるということになると、もはや私立と変わりがありません。むしろ、公的な予算がつぎ込まれることで、これまで私立学校が一生懸命取り組んできたことを踏まえ、さらに進化した学校を作ることができるようになります。

公立と私立を対比するときに、私が保護者の方々によく話をするのは、自動販売機のたとえです。「喉が渇いたと言って、何か飲み物を買おうとするときに、ちょっと悩みませんか」と。あらかじめこれだと決めている人は別ですが、ホットにするかコールドか、あるいはコーヒーが飲みたい場合でも、ミルクは入っているか、微糖なのか無糖なのか選びますよね。それと同じで、私立学校というのは、200種類以上のバラエティに富んだ飲み物が入っている自動販売機と同じわけです。

――その学校の建学の理念で、味付けがみんな異なりますからね。

小泉　それに比べて、公立学校は味付けのない「水」だったと思います。それが、今では例えばレモンウォーターのように、味付けのなされた学校が登場し始めている。そのうち、コーヒーにもなってみようかなという公立学校が出てきたときに、もともと独自の努力で珈琲を焙煎して淹れてきた私立学校は、どのように差異化を図らなければならないでしょうか。

文部科学省の学習指導要領は10年ごとに改訂されていますが、私立学校はさらにこれからの100年先を見据えながら変わっていかなければなりません。かつて大正デモクラシーの時代に、大正自由教育運動、新教育運動として改革に取り組んできたことが、今日の教育に繋がっているわけです。それから100年の年月が過ぎているわけですから、私立学校でもこれから何を目指していくのか、100年先、3世代先までを意識した教育をもう一度構築していく必要が

あると思います。

――新たな時代の澤柳政太郎や中村春二、小原國芳といった人々が求められている。

小泉　今日では、子どもの頃に海外で過ごしたり、外国の大学を卒業した先生も数多くいらっしゃいます。そうした多彩なキャリアを持つ先生方に、新しい教育を創ってほしい。日本の新しい教育のために、私たちは時間とエネルギーを費やす必要があります。

――私立学校には、100年の歴史の中で研究され実践されてきた、公立学校にはない蓄積がたくさんあります。そうした中で、公立学校にはない、私学の特色についてお教えください。

小泉　一つは宗教教育ですね。日本私立小学校連合会の調べによると、60%近い学校がキリスト教や仏教、神道など宗教を母体としています。私立学校が宗教を道徳教育として行うことは法律でも認められていますが、学習指導要領では2018年から道徳が特別の教科として認められました。その背景には、先ほど私も申しましたが、科学の進歩に対して、人間の心の部分が疎かになっているのではないかという問題意識があるのだと思います。ただし、数値評価は行わないということが教科化の条件となっていますが。

その一方で、私立の宗教教育を振り返ると、どの学校にも建学の精神というものがあり、最終的には子どもの教育、成長というものに繋がっています。それが私立学校の持つ特殊性であり、揺るぎのない部分だと思います。

――まさに私学の存在意義に関わる部分ですね。

小泉　二つ目は、私立学校がその子どもを全人的に預かるということ。公立学校でも今、専科制が話題になっていますが、それはあくまで学習内容の高度化に対応するためのものであり、基本的には学年ごとに担任の先生が子どもを預かるケースが中心になります。

それに対して私立の場合、一人の子どもを多くの教員で見て、その子をトータルな形で育てていくという考え方があります。ですから、学年が変わり担任が変わったら、次の学年では全く違う指導が行われるということはなく、その子どもに必要な教育を6年間かけて同じスタンスで行います。しかも、1年生ならここまで、2年生はここまで、6年生になったらここまで育てていこうという教育目標を、教員全員が共有しながら取り組むというのは、まさに私立学校ならではと言えるでしょう。

子どもの思いを叶える学校を選ぶ

――これから私立学校を目指される保護者の方々に、メッセージをお願いします。

小泉　小学校は国公私立合わせて、全国に1万9738校あります（令和元年度）。その中で、私立小学校は237校。全体の1.2%に過ぎません。要するに、100人に1人の子どもしか私立小学校には通っていないということになります。

しかし、私立学校にはそれぞれ、子どもたちをどう育てていくかという思いがあります。ですから、保護者の皆さんもそのことをよく理解し、どのような教育を行っているかを見ていただきたい。それが保護者の皆さんの一番の仕事だと思います。

名前でただ受ければいいとか、誰々が行っているからそこに行かせたいということではなく、私立学校がそれぞれ色を持っていますので、どの色がいいか、受けたいという学校があれば、その学校を徹底的に調べて、自分の子どもがその学校に合っているかどうか、あるいは保護者がその学校に6年間、子どもを通わせることをよしとできるかどうかということが、一番大きなポイントだと思います。

――各学校の建学の理念や、大事にしてきたものをよく見て選んでほしいですね。

小泉　いったん入学した後で、「こんな学校だとは思わなかった」というのは、子どもの責任ではなく親の責任です。小学校から大学までの期間でいちばん長い6年間を過ごすわけですし、その6年間が子どもの人生のいわば根幹を作るわけですから、小学校選びはとても大切なのです。ぜひいろんな学校を見て、どの学校が何を求めているのか、何を伝えようとしているのかということを知ってほしいですね。

――最初から決めつけるのではなく、いろんな学校に足を運び、子どもたちにも体験させながら学校の雰囲気を感じ取り、どの学校が合うのかをしっかりと見きわめることが大事なのですね。

小泉　それぞれの学校がそれぞれの特徴を持ち、それが私立学校としてまとまることで、教育の多様性が形作られています。受験は3校でも4校でもできますが、入学できるのは1校しかありません。入試が必ずしも思うようにいかなかったとしても、入学した学校が、その子どもにとって一番の学校だと保護者が思える気持ちで受験をすることが重要だと思います。小学校受験は保護者自身がどのように子どもに育ってほしいかということを真剣に考え、話し合い、確認していく大切な機会になります。

――本日はたいへん貴重なお話をありがとうございました。

小泉　ありがとうございました。

当日、本誌の取材と並行して行われたスペシャル・インタビュー（収録時間:10分30秒）が、動画でご覧いただけます。
ぜひ大学通信ONLINE（https://univ-online.com/）にアクセスしてください。